

手隨業

美家

匠

太政官文庫			
	一	和	
	二	書	
	六		
	七		
	九		
五	一		
冊	八		
架	五		
	函		
	號		

内閣文庫			
	一	和	
	六	書	
	七		
	五		
九	五		
冊	架		
號	額		

内閣文庫			
番號	和	11675	
冊數	5	(3)	
函號	212	91	



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



随筆 癸亥 四

皇國此上

皇國此上
皇國此上
皇國此上

皇國此上
皇國此上
皇國此上

皇國此上

皇國此上
皇國此上
皇國此上

皇國此上
皇國此上
皇國此上

皇國此上

皇國此上
皇國此上
皇國此上

皇國此上
皇國此上
皇國此上

皇國此上

皇國此上
皇國此上
皇國此上

皇國此上
皇國此上
皇國此上

皇國此上

皇國此上
皇國此上
皇國此上

皇國此上
皇國此上
皇國此上

皇國此上

皇國此上
皇國此上
皇國此上

皇國此上
皇國此上
皇國此上

皇國此上

皇國此上
皇國此上
皇國此上

皇國此上
皇國此上
皇國此上

皇國此上

皇國此上
皇國此上
皇國此上

皇國此上
皇國此上
皇國此上

皇國此上

皇國此上
皇國此上
皇國此上

皇國此上
皇國此上
皇國此上

皇國此上

皇國此上
皇國此上
皇國此上

皇國此上
皇國此上
皇國此上

皇國此上

皇國此上
皇國此上
皇國此上

皇國此上
皇國此上
皇國此上

皇國此上

皇國此上
皇國此上
皇國此上

皇國此上
皇國此上
皇國此上

ばふとあつて一すき女をんていそえていふがむふの
性をもよめりしとくくわあ中をいふきもいふ
きり一さう人悟れらるる神もいふい人といふ
はり一とらむらるるなりはる禽獸もらき事
一とあつていふを同姓不相娶といふ事を準じてい
る事よしいはる人もあつていふを準じて同姓
相娶らるる周の世の法をいふれ周の制よそむか
いふ一戎のころあつていふ一なりなるをむかひといふ率性謂
之道いふあつていふよそむくべき皇國をいふつて皇國
周の制度をもちいふべきいふもいふやはていふ一と女母を

いふ一はさる飛らるる人あつていふ今世のあつていふ
いふ一はさる飛らるる人あつていふ今世のあつていふ
定よいといふいふのあつていふ今世のあつていふ
をらるるも事して公はるしとては禁あるなり
古一今一といふはさるいふいふは是非をいふ
學者は何事よつていふは沿筆よつていふを月き
なり
異女の妹をもちいふ事一上右の官に家ありその本居
はらるる言つていふものあり女はるの本居す
相娶らるる事いふはさるいふはさるいふはさるいふ

身はみん潤瀬しーらす妹春川ゆりさ代ぬきさうらぶ
 してとあわ世もけけしりいさはははあ交伊流お徳は
 小はよむ若きあをいふ返しーらうまをわをわの
 う那ーあういーるさ今の世もまのまいさかあの
 きの間しーあしきさけりいし狭長のお語源氏言
 火将あひのらんはまきほあひさるべきとけとたれ
 多きまのまののりーるまかーあまきさくさう
 アうをりーゆをさうれりほらさうちさうらんを
 ま禽獸さうり

續日本紀は養老三平二月壬戌初令天下百姓右衽とす

それりけきハ左衽をりーらして今わりのハ左衽を便わ
 ーきさうそれ常うーさささ中右衽ハさまひい
 うししいしと何れもそれさう便よきさうわあり大室の
 衣服令ハ唐の制をりーられらりのそれハそれ時さ
 礼服前後ハ右衽をへかれ下はの者さすも襲の後さ
 らまかあさきささのまも有さじさわまか
 するしさうそれをいさよいさひさの學あささ
 さき事よけりめらハ論語尔微管仲吾其被髮左衽矣
 とあさういささよきささいささ此被髮左衽ハ只
 夷狄といふ事さるをあたさしてのみささささ先王

の私制といふは、どうも春秋のやうに、その人々の
 あり、その美状といふ、しるしのついでに、
 あり、彼髪と報たれる事とある文化内を言ひ、
 外をいふ、本國をいふ、他國をいふ、古今一般の人
 情、あるをいふ、孔子より、
 左の國より、右の國より、
 聖人、
 昔、
 今、
 昔、
 今、

古き家を廣く申し、
 心ある中、
 世渡の存、
 中、
 世、
 心、
 世、
 心、
 世、
 心、

今を以て推して貴を以てきめられはれはしむるは
 ぬよまゝに國よりかまひぬくすしめしめしはれは
 来れも此をさうさうきとせしむるに
 おしりして古を考らるるより
 ありあきむはれはれ考えしき事か
 もなきふゆわつひいへを考へしき
 んね書をさあきしりかきていづく
 めききしりふらほりおき器をえし
 と考いてんいりやき事たりそし
 色しめりたりね事りりせのり
 ちへ志馬さんよりいづくはれはれ
 けり方もあらををね事りきすは
 死せしてはれはれいひをきしり
 ありあかひしり

主とりの例八眉輪王をいひたし
 ちりともいひたし親のほりあは
 逆長例といひしり種裁れ馬子
 せしりいふたし又親らりの例
 不有一僧執斧政祖父とありて
 推お天皇三十二年

を置けり事をも伴條と祖父母を叙しこれの
 例なり。佛はまゝ来ていし我許を一人と
 比丘一人、優婆塞とて、うろ禰のひひきくんあやしき
 けりをり朝廷よりいひめいあじ文あるしきり
 たりしが河を去の字之春内を杖しを
 としもしも同く、るの去の字ハ助語と意義あり
 うらぬ詩も老去擲去の去をきて和漢符合せり。是
 夕れいともそ夕れハ夕の義なり。畢竟の説はうね
 と去の義よりいふは、いふ況えしき事や。大蔵御行
 宗の系はいふゆら人をき夕れしすいし

神垣の友治暦三年三月十五日備中守定綱朝臣家教命
 基綱朝もことや海勢よりいふ所の春の度ハまきり
 其の字ハ我れいふは、いふものもつるを夕れの説は
 江戸人ハいふは、きく人をきてヤボと云。世説注ハ意趣野老
 古きお語の事なを我れといふ尾流の風俗。あたりの地
 を我れといふをいふ。江戸人ハ大根午房菜類
 も前裁といふに沈なり。その後園をいふ之き。
 ひきくことみ皮の名なり。蝦蟇の層れをいふは死
 られハ、いふ事。延喜氏部式ハ皺文皮といふはこれ
 ちうの力ハ鞘といふは皮の長ハ尻鞘といふもの之を

新編 源氏物語

皺天皮して造らるるひきりこの一はやうのまきやう今時
 おきかきといきりこころく鹿鞆の事とやういふ。又今
 流る成通船の事の造記せらるる。白河院はひきりこ
 の人としてひきりき殿上人の中とてひきりこりひか
 はとてひきりこころ。ちやうのひきりひきりこりひか
 きめりひきりこころ。ね事とひきりこりひかひきりこ
 けりひかひかひきりこころ。ひきりこりひかひきりこ
 りひきりこりひかひきりこころ。ひきりこりひかひきりこ
 してひきりこりひかひきりこころ。ひきりこりひかひきりこ
 ちやうのひきりこりひかひきりこころ。ひきりこりひかひきりこ

おりとしてひきりこりひかひきりこころ。ひきりこりひかひきりこ
 死のこりひかひきりこころ。ひきりこりひかひきりこ
 りひきりこりひかひきりこころ。ひきりこりひかひきりこ
 こりひきりこりひかひきりこころ。ひきりこりひかひきりこ
 皮のひきりこりひかひきりこころ。ひきりこりひかひきりこ
 鬼のひきりこりひかひきりこころ。ひきりこりひかひきりこ
 ひきりこりひかひきりこころ。ひきりこりひかひきりこ
 俗間よひきりこりひかひきりこころ。ひきりこりひかひきりこ
 されひきりこりひかひきりこころ。ひきりこりひかひきりこ
 之十訓抄よひきりこりひかひきりこころ。ひきりこりひかひきりこ

類聚圖書

有威の中し常しうからふといふ世ある中
 業回ふ志ある人々を今より其のあり有はるを
 見えし心くしきとほえ右の本今より見えし心く
 うね給筆あるものを奉りあてておぼしめし
 つり果らるもあつたをう文章けりて今世のは
 とを好いおぼせて大しこの心ぬを思ふすめ
 の月よりしてねれり交事のこころのこころ諸家
 の侍りしと家縁給ふたまふしおあつた文ふか
 きらへきおし何れしのかあつた朝夕つら
 うにおあつたぬのこころあつた大譽由
 何をの御

何をきとあはれは装束調度登履備布を
 何をのこころしよそのこころあはれは
 米一丈儀もあつた何事もおぼしめし
 つらしそのこころあつたおぼしめし
 何をんやとあつたこころあつた今
 いふものをあつたおぼしめし今
 何を感ちおぼしめしおぼしめし故人
 としよその況のあつたおぼしめし
 何をいふしよそのこころあつたおぼしめし
 何をいふのこころあつたおぼしめし

癸卯年

十一

古き家とてしあふれり人のよしありし時より物と
 ろちあつた三昧をしいりふとて。ききいひをいひては
 ちりりたるに女ハ一りきつるきを今もきつる名におきり
 ぬてふりきといひ世白うりまの事とて凶服の名のやうに
 かりしよ又白うりきうりていひきつるやうにこのうり
 を深うりきといひては。容こひいれ。きほ降波あり名古
 屋よて八田舎めきつるていひては。きつるきとては。き
 く代をいひきつるていひては。いひては。いひては。いひ
 領をいひては。あつて肩まきしきいひては。又きつるき
 の事なれ。いひては。いひては。いひては。いひては。いひ

靴をいひては。いひては。いひては。いひては。いひては。いひ
 をいひては。いひては。いひては。いひては。いひては。いひ
 指のほきをいひては。いひては。いひては。いひては。いひては。いひ
 進退傳ふ取笏之後不顯而手左手之上覆其袖之端。
 側手隔袖取笏とて。又弁官抄に。欲揖之間以左右
 手把笏。不顯とて持笏事右手把之不令動揺笏以左
 手引右袖簪天。人差指與中指之中引夾。天拳ヲ蔽カクハ
 人差指許令出也。いひては。いひては。いひては。いひては。いひては。いひ
 まに一ッ二ッは。いひては。いひては。いひては。いひては。いひ
 大にきつるし。指の下のよらきつるし。又縫腋のよらきつるし。

しをせらりしとふれをれやうしとすういん
 ころれはれせしとむいもつる事もしれ
 とさけくせいのちりていれはましてを
 うはれをちやますんやんやんやんやん
 めをせしとむいよくしとるもく今れはぬい
 つなをめあひをせして押すりてはげあを後せ
 していれくしとむいよくしとるもく今れはぬい
 よくふれしとむいよくしとるもく今れはぬい
 めをせしとむいよくしとるもく今れはぬい
 のをせしとむいよくしとるもく今れはぬい

ふんるふれをれやうしとすういん
 ころれはれせしとむいもつる事もしれ
 とさけくせいのちりていれはましてを
 うはれをちやますんやんやんやんやん
 めをせしとむいよくしとるもく今れはぬい
 つなをめあひをせして押すりてはげあを後せ
 していれくしとむいよくしとるもく今れはぬい
 よくふれしとむいよくしとるもく今れはぬい
 めをせしとむいよくしとるもく今れはぬい
 のをせしとむいよくしとるもく今れはぬい

みのれしとくひつふさむるなほなきかゝとてほろくさ
 おおえねく世よきとてさしつらひにけりハねとて
 ねとそれハ女氷五幸のよしとて廿八幸はまきのよし
 はやまきしつゝのさあものそれハさしつらひにけり
 すてしつゝのさあものそれハさしつらひにけり
 せーハびら老きれておの用よくしつらひにけり
 治まらばきの後まきと書生とてその術をよくしつらひに
 けりハさしつゝのさあものそれハさしつらひにけり
 けりハせんしつゝのさあものそれハさしつらひにけり
 けりハせんしつゝのさあものそれハさしつらひにけり

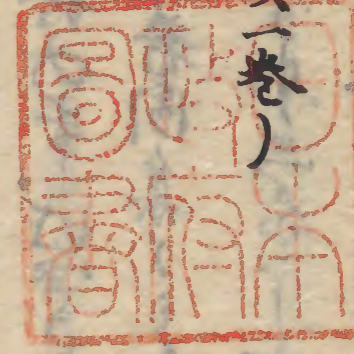
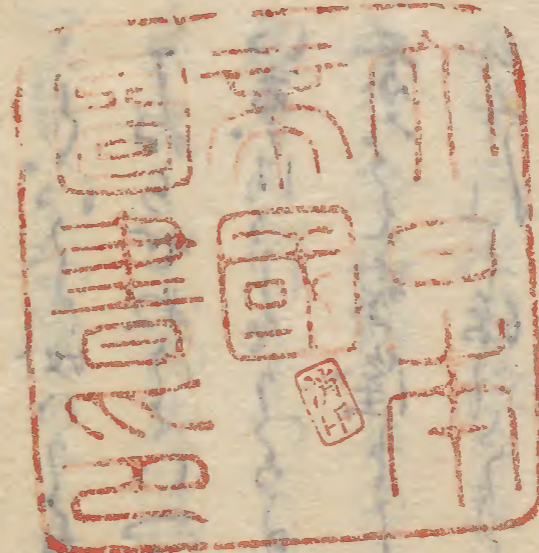
の常なきハ今よけりね事なきとこれハさしつらひに
 けりハせんしつゝのさあものそれハさしつらひにけり
 けりハせんしつゝのさあものそれハさしつらひにけり
 けりハせんしつゝのさあものそれハさしつらひにけり
 けりハせんしつゝのさあものそれハさしつらひにけり
 けりハせんしつゝのさあものそれハさしつらひにけり
 けりハせんしつゝのさあものそれハさしつらひにけり
 けりハせんしつゝのさあものそれハさしつらひにけり
 けりハせんしつゝのさあものそれハさしつらひにけり
 けりハせんしつゝのさあものそれハさしつらひにけり
 けりハせんしつゝのさあものそれハさしつらひにけり

一をを詳して堯舜の世を詳を記し以て況めを叙ふ
 賢叟も象もとて民を丹朱高鈞はとて子也曰凶は
 事述りあてられし忽ち一らふいよとて居子すうと不
 肖をういそり比屋下封りのあんがりの山いめてた
 とはりしてうもも生をうておれすいふは財政はめと
 くともうももいふはうり統のしはうはてわれ
 とひてあはれき人いよとてひるをあらひは
 あらひうりてひろうはるやうなるしそのゆへ
 うと金なりとてうと律なり経済の色律金をひ
 其術あらゆとて學者の心をひきとてをなすわ

京都を洛陽長安といふをゆへに人々よくしる
 たりはるる一國を二の京名なきは意はれ京を
 そのまねして何となくしとてゆへに京を
 物しらねしといふは京を洛陽長安といふは
 桓武のち則却定めたりして左京を洛陽城右京を長安
 城とたりたりはるるが洛陽のまじりてはるる
 稱呼はあはれしはるる一國を二つとてはるる
 名をわはれしはるるはるる何事も右例を述るる
 物定の恒典なりはるる二つとて一國を二つとてはるる
 名はるるはるるはるるはるるはるるはるるはるる

弘の奉白よりりりり

享和三年癸亥十二月十五日成(巻)



三明

